佳作

弟からの手紙

岩手県洋野町立中野中学校
三年　髙際桃々

プレッシャーと緊張でラケットを持つ手は少し震えていた。ペア・仲間・先生の声も遠いように感じられた。岩手県中学校総合体育大会ソフトテニス競技団体戦の決勝。自分の勝利でチームの優勝が決まる大一番。私は、一球に集中し、ペアを信じ、前向きに戦い続けた。そして、やっとつかんだ勝利。私も仲間も晴れた空に向かって喜びのガッツポーズ。心から嬉しかった。あくまで自分達の目標は全国の舞台に立つことだったが、一つのステップをクリアできたことは自分達の自信になった。

最後まで、戦えたのは弟や家族からの支えがあって達成できた。というのも、昨年の岩手県新人大会前のことだ。二連覇がかかったその大会に私は、大きなプレッシャーと不安を抱えていた。大会前日の練習を終えて、家に帰った私は気持ちの糸が切れ、母の前で泣いてしまった。母に思いを全て話した。ずっと優しくうなずきながら私の話を聞く母を目の前に涙が止まらなかった。最後に母は私に

「不安なのは桃々だけじゃない。頑張っているのはみんな分かっているから、頑張りなさい。」

と言った。母に自分の思いを聞いてもらって心が軽くなり、気持ちの整理ができ、私は大会に臨む思いを新たにした。

出発の日の朝、弟が早起きをして私を見送ってくれた。そのとき弟は一通の手紙を私に手渡した。驚きと嬉しさで胸がいっぱいになった。バスの中で開き、文章を読んだ。

「桃々、頑張れ。泣かずに頑張れ。」

という短いメッセージ。鉛筆でびんせんにでっかく書かれていた。弟達は昨日私が泣いていたのを見ていたのだろう。「泣かずに」という言葉が心に響いた。素直に嬉しかった。大事にしようと思った。弟の手紙が私に力をくれた。

迎えた団体戦。弟からの手紙を試合中もポケットに入れて戦った。弟からの手紙は私の励みになり、おかげで二連覇に貢献できた。

私は家族の良さとは何だろうと考えた。さびしくない、毎日笑顔が絶えない、私の良いところも悪いところも全てを受け止めてくれるなどとたくさん出てきたが、一番は支え合えることだと思う。家族でする未来の話も、兄弟でする手伝いも全部協力、支え合い。生まれたときからずっと一緒に過ごしてきたからこそ何でも言えて、助け合うことが普段からできていると私は思う。弟が私の涙を見て、私を支えるため手紙を書いてくれたのも、自分で姉のために何かしたいと思う気持ちからだったのだろう。

残念ながら、結果は東北大会ベスト8で敗退して、目標としていた全国大会への出場はかなわなかった。このチームで目標を達成できなかった無念さはあるが、今思うと、それも良い思い出となっている。チームメートをはじめ、私たちを支えてくれた方々と、ここまで戦えたのだ。次はチームはバラバラになるが、それぞれもっと高い所を目指して頑張ろうという気持ちも生まれてきている。

私は小学校三年生から今までソフトテニスを続けている。泣いたことも嬉しかったこともあった。私にとってソフトテニスは趣味でもなく、私を大きく変えてくれた宝物だ。そのソフトテニスを通じて、自分が成長したことは、信じる力だ。苦しいとき、それは何度もあった。大きな大会があるごとに、自信がなくなって不安になって弱い自分になってしまうことも分かっていた。そのたびに、仲間や先生・親・弟の顔が浮かび、一人じゃないことに励まされていた。信じることで自分に自信が持てた。この信じる力があったからこそ、心も強くなった。何度もある苦しい場面に打ち勝つことも、本来の自分の力を出すこともできるようになった。ソフトテニスをしていなかったら、支えてくれる人がいなかったら、私はここまで強くはなかったと思う。

私に力をくれた母の言葉、弟の手紙は大切なものだ。私はこの経験を受けて、自分も誰かに力を与えられる人になりたいと思った。どんなささいなことでも力になることを忘れず、これから過ごしていきたい。そして自分も、まだまだたくさんの力を誰かからもらえるようになりたい。力の大きさに気付けて良かった、そう思った。